

特集

『AIの遺電子』に学ぶ 未来構想術

編集にあたって

福地健太郎 | 明治大学 大澤博隆 | 筑波大学 宮本道人 | 筑波大学

今回の特集では、現役の研究者に、自身がかかわる科学技術が発展し社会に浸透した未来像を Science Fiction (SF) として描いていただいたものを掲載している。ふだんの特集にあるような最先端研究の解説ではなく、奔放な想像力が生み出した未来像がここでは語られている。まずその企画意図について説明しよう。

近頃、SF界がまた賑やかになりつつある。中国人作家・劉慈欣のSF小説『三体』が世界各地で大ヒットし、専門誌のみならず新聞やビジネス誌がこぞって特集記事を組んだのもきっかけの1つであろうが、SFが注目されている背景には、人工知能(AI)やVirtual Reality技術の躍進がある。科学技術の大きなブレイクスルーが社会の在り方を大きく変えつつあるのを目の当たりにすると、社会はそれに対して期待しつつも、変化に対する警戒心や漠然とした不安を同時に抱く。次世代の社会をどのように築いていくべきか、そのビジョンが見えにくくなったとき、SFの想像力に目が向くのだろう。話はフィクションだけにとどまらない。SF作家を招いてビジョン策定を試みる企業も増えつつある。

そんな状況において、実際に新しい科学技術の研究開発に携わっている研究者や技術者にとっては、現

实的でかたい未来予測を語る機会しかないことが多い。しかし、他分野の研究者がどんな未来を夢見ているのか、少しブレーキを緩めた話を聞ける場を作ってみたいと我々は常々思っていた。

さて、最近のSF分野における話題作の1つに、山田胡瓜『AIの遺電子』(2015～2017)がある。「週刊少年チャンピオン」(秋田書店)での連載時から注目を集め、2017年には文化庁メディア芸術祭マンガ部門で優秀賞を受賞。本誌でも「ビブリオ・トーク」欄にて、櫻惇志が同書を評している¹⁾。

同作品はシンギュラリティ後の、高度に発達し意識や人格を持ったAIやヒューマノイドが社会に浸透した人類社会を舞台としている。主人公はヒューマノイドが抱える精神的な悩みや病気を治療する専門医で、その治療過程を通じてヒューマノイドと人間との間に起こる衝突や軋轢を描く、一話完結型の作品である。手塚治虫『ブラック・ジャック』のヒューマノイド版だと言えば想像が付きやすいだろう。

注目すべきは、その作劇手法である。舞台となる病院に持ち込まれる相談事を通じて、ヒューマノイドが発達した社会で起き得る大小さまざまな事件がまず描か



れる。落語家を目指すヒューマノイドが、蕎麦をすするさまを上手に表現するために空腹を感じることを希望する、といったささやかなものから、学術的調査をAIに任せることに苦悩する研究者、さらには定められた寿命の制約を破ることをあきらめ、新興宗教を興したヒューマノイドなど、幅広い題材が俎上に載る。そしてそれらの解決方法を探るとき、物語は厚みを増していく。それらの事件はいわば、技術が社会に浸透する過程で必然的に起きる衝突や軋轢の結果である。その解決のためには、衝突を起こした双方の立場に対して深く洞察を与える必要がある。読者は物語に引き込まれるうちに、双方の立場に対する感覚を磨かれることになるのだ。

この作劇手法があれば、誰もが魅力ある未来像を描けるのではないか。

そこで今回の特集では13人の現役研究者に、この手法にのっとり新しい未来像を描いてもらうことにした。各執筆者には以下のように執筆をお願いした。まず、『AIの遺電子』作者・山田胡瓜氏に、山田流作劇手法を解説した資料をご用意いただき、これを読んでもらった。なお、今回この資料を山田氏本人に漫画化していただいた「SF漫画の作りかた」を掲載している。次にそれをヒントに、各自が研究している理論や技術が発展し社会に浸透した様子と、そこで起き得る事件、そしてその解決までの顛末を考えていただいた。最終

的な表現形態は自由で、プロットのみ記した企画案の体裁でもよいし、短編小説仕立てにしてもよい、とした。そして、原稿が集まった後に山田氏を囲んでの講評会を催し、互いの作品について議論する場を設けた。議論の結果を最終稿に反映してもよいものとした。

こうして集まったのが今回の作品である。正直なところ、執筆依頼を全員に送ったあと、はたしてどうなるやら、と気を揉んでいたのだが、寄せられた原稿に目を通すと、感覚・生命・意識・人格・生命などなど、現代科学が取り組むさまざまな課題がズラリと並ぶ結果となった。そしてそれらの作品を元に熱い議論がたたかわされた座談会の様子は、本企画の最後に収録してある。

さて、各作品を紹介するだけの紙面の余裕がもうない。が、本特集の記事はどれも肩の力を抜いて読める作品だ。パラパラとページをめくって、目についたものから好きな順に読んでいただいで構わない。

さあ、見たことのない未来に、さっそく足を踏み入れていただこう。

参考文献

- 1) 櫻 惇志：連載 ビブリオ・トーク：AIの遺電子，情報処理，Vol.60, No.8, pp.778-779 (Aug. 2019).

(2019年11月1日受付)

本特集は、JST RISTEX HITE「想像力のアップデート：人工知能のデザインフィクション」JPMJRX18H6 (<https://aisf.work/>) の協力を受けたものである。